校長研修だより１１３

地図が変わっていく時代

2023・7・12　重枝 一郎

４月の保護者会での校長あいさつの中で・・・

「本校の校納金等の値上げをします。確かに安い方が保護者もうれしい。しかし本校はこういうことをして，こういう設備があるおかげで，生徒はこんな風に勉強していて，いろんなところで評価されている。これをこれからもっとやっていきたい。校納金等をこのままにして教育環境のレベルを少し下げるという選択もあるが，私はそうしたくない。ぜひご協力お願いします。と事務長の吉松が言っています（ここは笑い取り）。冗談です。よろしくお願いします」

また，「今の生徒が社会の中心となる 2050 年を意識する」話や「人生は“たし算”」の話を本校の教育活動に関連付けて話した。

結果どうだったか？　拍手をいただいたのでよかったと思っている。その後のクラス懇談会の後，一人のお父さんが「校長先生の話が刺さりました。それであの後の学級懇談会で後援会評議員をすることにしました」とわざわざ話に来てくれました。よかった。しかし例のごとくスピーチの時間はオーバーして反省の心でもあった（笑）。

さて，保護者会の話をしたが，先生方はこれからクラスの生徒の進路について，保護者とともに悩んでいく。生徒は家庭の影響やジェンダーステレオタイプのような固定的な思い込みを誰しも多かれ少なかれ持っている。進路指導において，受験で受かることをゴールにしていたり，文学部は就職できないから手に職がつく看護学部とか，親の考えをそのまま受け取っている感じがある。親の世代を否定しろとは言わないが，一旦リセットしないといけないと思う。それも今からの進路指導をする私たちの役目だと思う。なぜなら，生徒が生きる社会を基準に考えないといけないからである。進路の話は新しい情報をインプットすることよりも，まず今まで受けてきた影響をリセットすることが重要な時もある。そうしてからでないと今のことは伝わらない。私たちの進路指導は，単にいい大学に導くことだけではなく，場合によってはキャリアの考え方を家庭から切り離すことも役目だと思う。だから私は，保護者会等で「私たちの時代とは違う。子どもの足を引っ張ることになっていないか」などの話を必ずするようにしている。

よく聞く話で，「将来，現在の小学１年生の何％は現存していない仕事に就くか？」「６５％」というアメリカの研究者の予想がある。少し大げさすぎるとも思うし，そうだろうなという気もする。でも考えてみたら，私たちがインターネット，メールやホームページなどを使い始めたのはおよそ１９９５年からである（学校はもっと遅いが）。たった２０数年で世の中がどれほど変わったか。生徒が新卒で入る会社は，その生徒が定年を迎えるまで存在していないかもしれないと思った方がいい。つまり，入社できればいいという感じではない。先の人生で，きちんと自分で人生のハンドルを握って生きていける人なのかということが大事になる。

これまでは，ゴールがあって逆算の考えができた。**今は，地図が変わっていく時代であり，問われているのはコンパスの方である。**

かつてベストセラーとなった「もし世界が１００人の村だったら」という本があった。最近，それを真似た「もし大学生が１００人の村だったら」という話を聞いた。全国平均では，村人の１２人は中退，１３人は留年，３０人は４年で卒業するけど就職していない，１４人は就職してすぐやめている，残りは３１人となる。なかなか心配になる話である。自分のクラスで何人大学に進学するか，中退者が１００人中１２人いるわけだから，クラスの人数に 0.12 をかけたら，自分のクラスから何人退学するかという理論値は出る。それは誰なのかを想像してみる。その原因は，日頃の生活態度で想像するかもしれないが，生活態度は良いが，進路のミスマッチや家庭の影響を受けただけの考え方の方が心配になる。